
ファントム

花香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファントム

【Nコード】

N3490H

【作者名】

花香

【あらすじ】

2055年、若き天才科学者（主役）が活躍した時代は遙かな過去となった、星系歴998年。宇宙星系警察 コスモポリス と宙族 スペース・パイレーツ のイタチごっこが盛んな時代。広すぎる宇宙の秩序を護ることを掲げた宇宙星系警察の内部は静かに腐りだしていた。

0話、2055年9月1日

「ふああ。

もうこんな時間？」

欠伸を一つして、数字の並ぶ画面から天井へと目を向け、体を椅子へ深く沈める。

「あと、もう少し…もう少しなだけどな〜。

つつ〜か、もう少しだよな??」

「ああ、もう!」

とブツブツと文句を垂れながら、ヨイセツ!と声をかけてまた元の態勢に戻る。

ポーと仄白く輝くパソコンの画面には、上から下までびっしりと数字が羅列している。

もう、かれこれ8時間以上は羅列数字と向き合っていた。

その羅列を見て、これが何かを判断できる人間はいないだろうが、何のためのものは多くの人が知っている。

これは、新しい開発プロジェクトに必要な不可欠なプログラミングだ。

その調整は、最終段階ではあったが、あともうちょっと。

後少しで完成するという段階になって、エラーがあることが発見された。

つい昨日のことだ。

製作チームの責任者として、そりゃあ連日徹夜なんてことはザラだったか、

「だからって、こりゃ無いだろう。」

最初の頃のあのサクサク感と、今のこのダメダメ感。

連日の働き過ぎで肩は凝るし、腰は痛いし、目はシパシパするし……

「もう、寝たい。」

「放り出したい。」

「布団が恋しい……」

と一人さびしく愚痴りたくもなる！

「あ~~~~あ」

画面と向きあう度に、「こんな厄介な仕事引き受けなきゃよかった……」とすっごく思うが、今さらだ。

コンソールに手を乗せ、高速で画面を上下させる。

並んでいるのは、数時・図面・数字・図面・時たま文字に数字数字数字……！

幾ら確認してもエラー箇所が見つからない。

完璧なはずのプログラムは、最後に自動チェックすると、赤い点滅を画面いっぱいに広げる。

全く、忌々しいことこの上ない。

「ふう。」

椅子から離れて、背伸び。

目についた冷めきったコーヒーをガブリと一口して、再び画面と睨めっこ。

さっきから、この繰り返しばかりだ。

集中力なんてものは、とつくの昔に切れていた。

プログラムの開発製作室と化している研究所の一室には、特別室なるものがある。

高名な研究員のための部屋で、一流ホテルのスイート並みに豪華で、最新機器が勢ぞろい。内線一つで何でも揃うという、素っつ晴らしい部屋になっている。

一般研究室が、雑魚寝上等！掃除はちゃちゃっと掃除機かければいいんじゃない？最新鋭の機器なんて、成果が上がってから言え！みたいな感じで殺伐としているだけあって、この部屋を使える研究員は、涙を流して喜ぶものだ。

初めて入室許可が下りた研究員なんて、あまりの喜びで仕事が手に付かないという弊害まであるぐらいに。

田辺優斗は、現在この部屋、一流ホテルのスイートルームと言わしめる特別室にいた。

使い慣れた生活空間のように、何の違和感もなくそこを自由に使う。優斗にとっては、誰もが涙を流して喜ぶ空間も、すでに単なる研究スペースの一つであり、また慣れ親しんだ生活空間の一つとしての認識しかなかった。

「くそっ！！」

苛立ち混じりに舌打ちし、目を手で覆い上を向く。

眠いわけではない。

眠気のピークはとうに過ぎ、逆にハイになっているが、如何せん。肉体的疲労が限界にきつつあった。

目に当てた手が重く、もう片方のだらりと下げた手が重しのように負荷をかけ、ともすれば体が床に引っ張られている錯覚に陥る。

機械の重低音と、時計のカチコチと一定のリズムを刻む音がその錯覚を深くする。

「あゝ、ダメだ……」

その後の言葉は無理やり呑み込み、頑張るぞ〜!!となんと気合の入らない掛け声を出して、また画面とにらめっこを始める。

「あと少しだ!」という言葉は何度も頭の中で往復させ、先と同様かそれ以上の速さで画面をスクロールさせ、キーボードを打ちつけること暫し。

「……あつた? |あつた!!」

途中の記述の違和感に目を眇め、次いで前後の記述と照会していくことで見つけたのは小さな齟齬。極小のエラー。

見つけた齟齬は些細な間違いだったが、その前後がまずかったのか!優斗は見つけたエラー箇所を一心不乱に解析し、小さなエラー箇所が齟もつしたシステムの改変を高速で直していく。

たかが一か所のエラーだが、それが重要な部分に引っかけられていることも問題だな。などと唸りながら、それでもこれなら

「終わった!!」

何とかならないレベルではなかった。

「長かった。めちゃくちゃ長かった……」

ほうと息を吐き、首を回す。胸は何やらジンと痺れたように熱くなり、目尻にうつすらと涙が浮かんでいた。

これで、心おきなく眠れるかも?

ふっと見やったパソコンの画面上では、プログラムの確認作業が目まぐるしいスピードで行われていた。その流れは人間の目では追えないほど速い。

待つこと5分。画面上には

『 O K 』

でかかどグリーンで表示されたのは夢にまで見た終了のサインだった。

「終わった！これでやっと終わったよ

」

イヤッホウ！とガバリと椅子を蹴倒して立ち上がり、いそいそと優斗はパソコンからLRICD（自己学習集積回路デバイス記憶装置Ⅱ通称エル）を取り出した。

直径5センチ、厚さ2ミリのLRICDは、2050年に優斗が開発した新型記憶装置であり、2055年の現在では従来のCD-R OMやMOといった記憶装置は、優斗が開発した新型に押されて市場から姿を消した。

それは、ただ記憶容量が大きかったという理由は勿論のこと、その用途が画期的だったからだ。

初めに組むシステムに必要な情報をインプットしておけば、インターネット回線に繋いでおくだけで勝手に必要なプログラムを組み、常に新しい情報を蓄えてくれる。そればかりか、単純なミスなら自己修復し、使用者が間違っていることも示唆する。

使用方法も簡単。かつウイルスにかかりにくく、強度、処理速度は群を抜き、情報整理の美しさなどもあり、企業だけでなく、一般社会に流布するのは速かった。

今や、一般家庭にある家事用ロボットやテレビ、電話、セキュリティテ

イーシステムには勿論のこと、企業のデータベース、国家、軍事のシークレット回線にまで使用され、LRICD^{エル}なしには社会が成り立たないというレベルにまで浸透してしまっていた。

『田辺優斗』

この名が世界中に広まる一因になったシステムだ。

そして、今、優斗が手にしているLRICD^{エル}は、世間一般で出回っているそれとは一線を画するモノ。

優斗が苦心の末に完成させた、第二世代型LRICD^{エル}である。

世界何十カ国が提携し、始動した一大プロジェクト。

その中心的役割を果たすプログラムの中枢に据えられるプログラムが、今、優斗の手の中には納まっていた。

「長かった。ああ、本当に長かった。」

思い出すのは今までの2年。

開発当初の歓迎ムードが、半年過ぎれば「これからですよ」と何もしない外野から温い視線を向けられ、

1年過ぎれば「これだから」と、訳知り顔で話しだす野次馬が開発の「か」の意味も知らないくせに論評をあれやこれやと始め、2年過ぎれば別機関の研究者から揶揄嘲笑。

気づけば「ふふふつ」と、ひたすらに黒い笑いがあふれてたが、優斗は気づきもしなかった。

ざま〜見やがれ！

この俺様に膝まづいて許しを乞うがいい！

心の中で浮かべる黒い感情に、一層笑みを深めたその時、

「チーフ！！！！！」

ドアを勢いよく開け、歓喜を露あらわに現れたのは、苦勞の末に白髪が目立つようになった男。

「水原センセ！」

水原誠。優斗が指揮するチームの最年長者であり、チームリーダーとして辣腕を揮ってもらっていた優斗の片腕だった。ずんずんと部屋に入っていくる水原に、優斗も喜びの笑顔で迎える。もうすぐ還曆を迎えるというのに、あまり節くれだっていない若々しい手を、優斗は差し出されるままに力強く握った。

「 ついに！」

ついに、完成しましたね！！！」

優斗が握った手を、優しく労わるように包む水原の目には涙が浮かんでいた。

「良かったです。本当によかったです……」

感慨深げに水原に云われると、優斗の目も水原につられるように視界がぼやけた。

「……」
「……」

二人は、声も出せずに暫し喜びを噛みしめ、涙を流し、手を握りしめていた。

それは、歴史を変える技術の完成を喜ぶ感動的な一幕。しかし、

「ぶはあっ！」

感動的な場面に我慢できない！
と言わんばかりに思わずといった感じで、噴き出した優斗のせいで壊れてしまった。

それにつられて笑いだした水原にしても、男二人での涙の一幕は面映ゆさを感じたのか、笑い出していた。

「どうです？」

完成祝いに一杯？」

クイツと酒を飲む仕草で茶目つけたっぷりに言う水原に、優斗も笑顔で頷く。

二人が向かった先には、上等なテーブルの上に、堂々と極上のワインが置いてあった。

おや？と首を傾げた水原に、しまった！と優斗は焦ったが、聞かないでおいてあげましょうとばかりに意味深に水原に笑われれば、誤魔化し笑いをするしかなかった。

こぼこぼこぼつ。とワイングラスに注がれる赤い液体。

綺麗な赤が照明に照らされて、なおいっそうルビーのように輝いている。

二つのグラスに注ぎ終え、

「まあ、今日は何も言いませんよ。」

と朗らかに笑って水原は優斗にワイングラスを渡す。

「もう、18歳でしょ。そのころには、私も飲んでましたからね。」

孫を見るような、悪戯小僧を笑って許してあげようとも言いたげな水原のニンマリと細められた目線に、口を尖らせながら、でも嬉しそくに優斗はグラスを受け取った。

「プログラム完成に！」

「2年間の戦いへの勝利に！」

「乾杯！！」

チン！と軽やかな音が静かな部屋に鳴り、笑顔で二人は杯を乾した。口に広がる豊潤な香りは、さすがは最高級のワインといったところか。

舌を楽しませ、喉を鳴らした赤い液体は、食道をすんなり通り過ぎて空っぽの胃の内部をじんわりと熱くさせる。その感覚に優斗は酔いしれていた。

「ところで、あれはどこに？」

きよろきよろと視線を投げかけ、呆けた表情を見せる水原に、

「あれは、ここ。」

ぽんぽんと、胸ポケットを叩きながら、優斗は先ほど完成したプログラムをテーブルの上にそっと置いた。

「おお！」

感嘆のため息を吐き、宝石を扱うように水原はそれを手にする。その眼には妖しい光が鈍くチラツと瞬き、すぐに喜びの明るい輝き

に隠した。

「ええ、そうなんー」

突然、優斗の息が切れた。

体中を電気が這いまわり、痺れで息が乱れ、空気を吸うことができない。

ガクリと力が抜け、たまらず優斗は崩れた。

横向きになり見上げた視界の中で、水原が狡猾な笑みを零していた。

「……な、に、を？」

吐き出すばかりの息の間から切れ切れに優斗は口にした。

頭は満足に酸素が送り込まれていないせいで、すでに重たい霧が立ち込め、思考が定まらなくなってきている。

痺れる体は、凍るように冷たくなり始めていたが、それすらも認識できず、目の前に迫る危機を優斗はどうすることもできない。

「君が悪いんだよ。」

ちかちかと赤く、黒くなる視界に、水原の冷酷な表情が映る。

その目に残虐な青白い炎が揺れていた。

「私は、努力を重ねてきた。まあ、秀才だね。

ここまで来るのは、本当に大変だったんだよ。」

昔を懐かしむように、青春時代を語るように水原の目が細くなり、

「君には到底、分かりえないことだろうけどね！」

次の瞬間には、憎悪の視線でもって優斗を睨みつけた。

「邪魔だったんだよ。君は！」

秀才の私には決して追いつけない！

君の天性の才能が！

その非凡な神に愛された頭脳がね！」

容赦なく叩きつけられるその罵詈雑言に、しかし優斗は何の反応も返せない。

水原の憎悪の視線も、悪態も優斗にはすでに理解できるだけの余裕がなかったからだ。

ただ、水原が愛しむように

「これは。このLRICD^{エル}は、私のものだよ。」

とせせら笑うように言われて、反射的に

「か、……え……せ」

と口にしたが、その視界はすでに水原の方は向いておらず、伸ばしたと思っただ腕もびくりとも動いてはいなかった。

「貴方の遺体は、私のLRICD^{エル}で機動した船で送ってあげよう。

いつか、貴方が言ったように」

虫の息の優斗を無遠慮に見つめる水原は、視線をそらさずにただ待っていた。

「……」

急速に光を失うガラス玉。

田辺優斗の最期の息は、静かな室内に吐き出され、消えた。

西暦2055年9月1日。午前4時。

田辺優斗、死亡。

このセンサーシヨナルな通知は世界を瞬くまに広がり、死因として発表された心筋梗塞は、様々な意見が飛びかった。

同日、死亡解剖を終え、その結果から改めて死亡原因が発表されてもそれは収まらなかつた。

世界中が若き天才科学者の夭折に嘆き、研究所には世界各地から著名人から一般人までがためかけ騒動にまで発展し、連日、優斗の訃報が何度もテレビやインターネットに流れた。

若き天才科学者、田辺優斗氏（18）は、心筋梗塞のため9月1日午前4時未明、死亡。

一昨年から取り組まれていた、宇宙船の新たな基盤にL^{エル}RICDを用いる計画を推進していた田辺氏の開発は、最終段階まで迎えていた模様。開発チームの面々は、完成を間近にした訃報に悲しみの涙を流し、田辺氏の無念を嘆いている。チームリーダーの水原誠氏は、田辺氏の意志を継ぎ、開発成功へと萬進することを声明し、成功のあかつきには田辺氏が生前望まれていた通り、宇宙へと遺体を葬ることを涙ながらに語っていた。

2055年10月10日。

第二世代型LRICD^{エル}完成の報が世界中を席捲。

『水原誠』の名は歴史に名を刻み、一躍時の人となった。

2056年9月1日。

水原誠の第二世代型LRICD^{エル}を基盤とした宇宙船2-11型は、
冷凍カプセルで永遠に眠る田辺優斗の遺体に乗せて、宇宙へと上が
った。

このニュースはライブで大々的に放映され、水原の功績を讃えたの
か、それとも天折した優斗の冥福を祈ってか、後『ライムライト』、
“名声”の名を冠する名で呼ばれる。

優斗に乗せた宇宙船『ライムライト』が、その後地球へと帰還を果
たしたかどうかは定かではない。

1話、宇宙警察 新米警察官

広大な宇宙空間へと人類が進出し、限られた者たちしか立ち入ることが許されなかった宇宙空間は、西暦が旧暦として捨て去られ、新たに星系暦元年を迎えたときには、万人のものとなっていた。

広大な宇宙を我がもの顔で往来するようになり、そこに何ら疑念をもたない時代を迎えた現在は、スペース・バイレックス星系暦998年。大宇宙賊時代真っ盛りだった。

しかし、今すいすいと宙を泳いでいる卵型の小型探索船 シークの周りは、至って平穩。

宙族のちの字も見えないぐらいの平和そのももで、いつそ暇過ぎて眠れそうなくらいだったが、

『ガーガツ ジッツ』

「第八主艦所属、K-10機ジーン・クリフです。
第八主艦、応答願います。」

不審船など欠片も見えない周囲を真剣な様子で見据えたまま、通信回線を開いた青年ジーンは緊張した面持ちで口を開いた。浅く上下する肩や、手に汗を握るほど緊張しているのが笑いを誘う。

『こちら第八主艦。K-10機、何か？』

抑揚のない女性の声、短い質疑にジーンはグツと口を引き結んでい
た力を緩め、努めて冷静な風を装った声を発する。

「ポイント3・8にて、漂流物発見。
漂流物条項規定により回収いたします。」

回線先に回収予定漂流物の映像を流し、『了解』の二文字を聞いて回線を閉じたジーンは、ふくと額に浮かんでいた汗を拭った。

ジーンが第八主艦、宇宙航路交通規制安全課（通称公安課）に配属されたのはつい2週間前だ。

先月、宇宙警察学校を卒業したばかりで、ジーンは未だ学生気分が抜けきっていない。

宇宙警察本部がある コ・アン星 での新任式を済ませ、すぐに第八主艦へと赴き、艦内説明、公安課内での顔合わせに、第八主艦管轄の巡回空域の確認、主な仕事内容の確認と慌ただしく頭に叩き込まれて、昨日までは巡回見学をさせられた。

そして、今朝のことだ。

朝礼が行われる一室で、にこやかに挨拶した課長は開口一番にこうのたまったのだ。

「もう大丈夫だろ？」

と実に爽やかに。

ついで、ジーンを含めた新米警官5名に、軽い調子で巡回航路の入ったデータをポンと渡した。

「……え???」「」

突然の出来事に当然のように何人かが困惑を露にしたが、さっくりと無視して、

「今日からはデータ通りに廻ってね。
君たちなら大丈夫さ、一人でも。」

ハハハツとワザとらしく笑い、かなり適当な感じで言い放つと、

「いつてらっしやい」

と手を振られて室内から追いたてられた。
5時間前のことである。

それから昨日まで見学させてもらっていた先輩のユアンに、ポンと頭を叩かれ、

「お前なら心配要らないからな」

と、ここ何日かで乗り始めたばかりの『K-10』と表記されているシーク に、準備もそこに押し込められるように搭乗させられ、気付けば宇宙空間に放り出されていた。

別に1人で巡回することには、さして思うこともない。
むしろ、1人の方が気楽にできるし、ユアンに引っ付いて見学する
ときにも出来ない仕事ではないと感じていただけに、最初の衝撃か
ら立ち直ればむしろラッキーとも思った。
けれど……だ。

慣れていないということは、それだけで出来て当たり前、余裕で出
来ることにも不安を与えるのだと気付くのに、1時間もかからな
かった。

そして、不安になっていると自分自身が気付かなければまだ良かつ

たのだが、気付けばそわそわするし、必要以上にがちになっってしまうものだ。

そのせいで、ジーンは巡回航路に入ってから2時間過ぎたときにはすっかり疲れていた。

そして、更に時間が経つと、あれほど不安に思っていたことにも慣れてしまい、今度は逆に不審船も不審物もない航路につまらなさを感じ始めていた。

何もないことが一番！

と巡回始めたときは思っていたのにも関わらずだ。

昼食を船内で取り、さらに1時間。

正直、暇を持て余して始めていた時に出会ったのが、何てことのない目前にある漂流物だった。

「ふうっ」

主艦への今日初対応での緊張を、一息入れるて完全に捨て去る。故意に肩から力を抜いて、球状型操縦桿ソフエアに手をめり込ませた。

視野 良好

システム 良好

目標指定 良好

シンク口 良好

………

視界の端に浮き上がる幾つもの表示に、さっと目を通す。

全てがオールグリーン。問題がないことを告げている。それじゃ、行くかとジーンは小さく

「GO！」

と呟き、漂流物へと向かっていった。

右に左に、上へ下へと視野に入る岩石もどきや石を、海を泳ぐ魚のようにすいすいと器用によけ、漂流物へと迫る。

大小様々な奇形岩石類をシークに掠らせもせず、初めに算出した最短距離よりも更に短く、目測で測っていた通り、自分が思う通りに滑らせる。

近くで見ていた者がいれば、感嘆の声が漏れたかも知れないほど、それは無駄のない美しい航行だった。

しかし、ジーンにとってすれば宇宙警察学校の実技試験の続きをしているような気がして、褒められたとしても学生時代のように喜べないどころか、ハッキリ言って嬉しくない。

学校の実技試験に必ず出てくる、この目標物までの最短航行の上位に名を連ねていた時は、胸を張って誇れたのだが、その結果が今の状況に直結しているかと思うとため息さえ零れる。

なぜなら、今ジーンが第八主艦公安課に所属している理由が、“最短航行上位者”だったからなのだから。

ジーン同様、第八主艦公安課の同期他4名もその例に漏れず、“最短航行上位者”の常連達だ。

目視が可能なほど漂流物に近づいたジーンは、シーク下部に収納されているアームをこれまた自分の手のように器用に動かし、後方収納スペースに収めると、すぐさまアームをしまつて巡回ルート

へと戻った。
詰らないことこの上ない。

これなら、惑星内勤務の方が良かったかな。

と一人で廻り始めて1日も経っていないのに、愚痴を零して遠い目をするのだった。

『ピピッ』

そんな不謹慎な思いに耽っていたとき、突如通信回線の応答願いを示す青い表示が浮き上がる。

自分の不謹慎さがばれたのか！ とドキッと心臓の音が聞こえそうなほど驚き、慌てて通信パネルを開いた。
その通信パネルの向こうには、

「よー！」

笑顔が怖い上司の顔でも、意地悪なにやにや笑いをする先輩のユア
ンでもなく、ジーンがよく知る馴染みの顔が映っていた。

「K-9機、どうかしましたか？」

慌てて開いて損したとばかりに、ジーンは冷たく言い放つと同時に、
何も無いんだろうと視線だけで切って捨てて、通信パネルに手を伸
ばす。

「ちよつ、たんま！ たんま。

切ろうとすんなよ。」

速効で切ろうとしているゾーンに、待て待てと身振り手振りで引きとめるのは、第八主艦公安課新人5名の内の1人、シーク K・9 機に搭乗しているマクスウェル・カイザスだ。マクスウェルは切られてなるものかと、コホンと咳ばらいして口火を切る。

「巡回コースで大物発見！」

「ちよつち、一隻じゃ手が出ないから、こつち来てくれよ。」

「大物？」

「そそつ！大物だよ。お・お・も・の！！！」

「さつさと来いよ。ぜつたい、大物だからよ！」

にこにこ顔で言いたいことだけ言うと、「それじゃ待つてるぜ！」と言ってさつさとマクスウェルは通信を切ってしまった。

「……………つて、おい！」

何も映さなくなったパネルに向かってのゾーンの言葉は、虚しく船内で消えた。

パネルの右下では、K・9 機から寄越された現在の座標が示されている。

「まったく、何なんだあいつは！！！」

碌に説明もしないで、勝手に捲し立てて、来ることを疑わない。こつちは無視したつていいんだぞ！と思ってもするが……

「はあ」

諦めたように深くため息をつく、ジーンは座標地点を確認し、光速航行態勢に移行する。

「これも、ペアだから仕方がないんだ。」

ぐちぐちと呟きながらも、手は速やかに動いている。

「“ペア”か……」

ともう一度呟いた声は、かすれていた。

元々巡回時は、二人一組で行われる。

巡回航路は決められているとは言え、広い空域内で何があるかは分からない。

咄嗟の時に対応しようにも、一人ではどうしようもない時は多々ある。

そのためペアを組み、ペア同士は緊急時に対処できる距離を航行するようにしているのだ。

だが、だ……

新人同士で組ませるって、何かおかしくないか？

昨今の情勢が〜とか、今は空いてる先輩がいなくって〜とか、そんなわけないだろ！その辺にいるだろうが！と思わず言いたくなるような理由で、ジーンとマクスウェルはペアと相成ったのだった。不幸中の幸いか。それとも、知っていたからなのか。

ジーンとマクスウェルは十年來の付き合い、いわゆる幼馴染であり、お互いの実力を熟知しているから、まあ何とか受け入れられた。

「これで、マックスじゃなかったら……」

本気で泣いて、縋りついてでも先輩と組ませてもらったね！
絶対に！

そんな小言を零しながら、シーク の高速航行の準備は滞りなく
終わった。

その瞬間、シーク は静かに光の粒となり、今までいた空域から
あっという間に姿を消していた。

2話、“大物”って???

通信回線を一方的に切ったマクスウェルこと、マックスの目の前には、第5星系第3惑星を周回する衛星の一つがある。

マックスのパネルには衛星の一部の画像が拡大表示されていた。その画像には、見たところ随分と時代がかった金属片が鈍く光っていた。

はつきり言って、人を呼びつける程の大きさもなく、衛星周辺も静かなもので回収に梃子摺る要素は何一つないように見受けられた。

しかし、マックスは

あれは、ぜつつつたい……

ぐふふふつと気色の悪い笑みを浮かべながらマックスはジーンを待った。つのだった。

そして、待つこと10分

『こちらK-10機。マックス、応答しろ。』

光速航行から通常航行へと切り替えたジーンのシークが、マックスの機体へと近づきつつ、回線を開いていた。

「遅いよ！ジーン。」

早く来いって!!」

『遅いってなんだよ。俺が廻ってたのは第4星系なんだぞ!!』

むしろ第5星系までおよそ10分で航行してきた俺を褒めると内心で呟くジーンは、不機嫌そうにしながらもマックスのシークの横に、ぴたりと自身の機体を横付けした。

「それで？ どれが大物だつて？」

ジーンが見たところ、マックスが梃子摺りそうな“大物”らしきものの陰は見えない。

「あれだよ、あれ!!」

衛星のところに金属片見えるだろ？」

ジーンへと拡大映像と衛星全体映像を送りながら、マックスは目をキラキラ輝かせたが、

「はあ？ この金属片??」

送られてきた映像と、自分の機体からの映像を照合したジーンは、その何の変哲もない金属片を見て訝しげな顔になっていた。

「あれのどこが“大物”だつて？」

どう見ても、ただのゴミだろ。」

「あまい!!」

「何が？」

「あれは、ただの金属片なんかじゃない!!
スペース・バイレツ
宇宙族のお宝だ!」

自信満々に断言するマックスに、ジーンは呆れてモノが言えない。
なぜ、ただのゴミを見てそんな考え方ができるのか?

どこにでも転がっている金属片を、どう見たら宇宙族の宝だなんて
スペース・バイレツ
思えるのか?

ジーンは十年來の友人関係を改めた方がいかなと頭の片隅で考えながら、速やかに金属片へと向かった。

その様子に、危ないぞ! 急に近づいたら罠があるかもしれないぞ!
! などと訳の分からない戯言を言っているマックスは完全無視。

「それで、何が“大物”で、どれが“宝”だつて?」

「……………」

見事な操縦で金属片へと近寄ったジーンは、頭が沸いているとしか
思われないマックスへと送った映像に、常夏頭のマックスの思考は
停止した。

「どうなんだよ。マックス。」

「……………てへ(笑)」

「“てへ(笑)”じゃないだろうが!!」

そこには、やっぱりどう見てもゴミとしか言いようのない、単なる
金属片の塊があるだけだった。

その大きさも、衛星に埋もれている箇所はあるものの、全長は2メー

トルあるかないかといったところで、ゴミとしては小さい部類に入る。

20メートル級の シーク なら余裕で回収できる代物だ。

何でこんなのをにこんなとこまで来てるんだらうと、ジーンはため息をついた。

「早く降りて来て、さっさと回収しろ。」

静かなジーンの口調に、マックスはびくりと肩を竦めた。

怒ってるよ〜

汗をたらたら流しながら、滞空場所からスルスルと降りてくるマックスの機体。

その動きはジーンと同様に無駄のない動きなのだが、マックスの心情を表わしているかの如く縮こまって見えた。

「直ちに回収します!!!」

畏まった口調で、びくびくさ加減を顕著に伝えてくるマックスに、ジーンは金属片から離れるように距離を取る。

すると、入れ替わるようにマックスの機体が滑り込んできた。

「お宝だと思ったのにな〜」

と愚痴りながら、マックスは シーク から、先程のジーン同様のアームを伸ばし、件の金属片へと迫る。

その金属片は衛星に埋もれている箇所があり、マックスは回収作業がしやすいように、まずは金属片周辺の岩石を除去し、ゆっくりと金属片を引きづり出した。

その引き出された金属片は、ジーンの目測通り2メートルちょいの大きさのもので、楕円の形状をしていた。

小型船の脱出ポットか何かのようだとジーンは検討をつけるが、

やけに古めかしいな。

とその塊のあまりにも時代がかったフォルムに驚いていた。

「……………骨董物か……………」

小声で独り言を漏らしたジーンは、“骨董屋”のことを思い浮かべていたが、

「何か言ったか？」

さくさくと回収作業に勤しんでいるマックスの声に、いやとだけ答えて作業が終わるのを待つ。

スルツと シーク 内に収められていくゴミを見ながら、

今夜は御馳走だな。

とジーンはにやりと笑った。

俺に、迷惑かけたんだから。当然だよな

こくこくと頷きながら見つめるのは、マックスだ。

今日の迷惑料として、夕飯に何を奢らせるかと真剣に、しかし小悪魔的な微笑を湛えて思考するジーンに、ぶるっとマックスの背筋が震えた。

マックスが己に降りかかる不運を、“嫌な予感”がすると冷や汗を

流し、ジーンがあれにするか、それとも……と考え、頭の中を大量の料理と酒で埋まようとしていたとき、

ピピッ

通信回線から異音が発された。

何事だと身構えたジーンとマックスのパネル上には、

帰艦されたし

音声での司令ではなく、文面での司令が浮かびあがっていた。

それは、滅多なことでは使われない、広範囲緊急連絡であり、上司からも先輩たちからも使う機会があまりないものだと説明されたものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3490h/>

ファントム

2010年10月11日20時56分発行